



J613-M0005-12 Rev.G 070817



最初にお読みください

CentreCOM® 8424XL/8424TXリリースノート

この度は、CentreCOM 8424XL/8424TX をお買いあげいただき、誠にありがとうございました。
このリリースノートは、取扱説明書（J613-M0005-10 Rev.B）とコマンドリファレンス（J613-M0005-13 Rev.F）の補足や、ご使用前にご理解いただきたい注意点など、お客様に最新の情報をお知らせするものです。

最初にこのリリースノートをよくお読みになり、本製品を正しくご使用ください。

1 ファームウェアバージョン 2.7.6-05

2 本バージョンで追加された項目

ファームウェアバージョン **2.7.3-07** から **2.7.6-05** へのバージョンアップにおいて、以下の機能が追加されました。

2.1 RADIUS バックアップユーザー

 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「ユーザー認証データベース」

RADIUS サーバーからの応答がなかった場合にだけ使用される特殊なユーザーアカウント（RADIUS バックアップユーザー）をサポートしました。

RADIUS バックアップユーザーを登録するには、ADD USER コマンドの RADIUSBACKUP パラメーターに YES を指定します。

なお、RADIUS バックアップユーザーを1つでも登録している場合は、認証の順序が「RADIUS サーバーによる認証」→「ユーザー認証データベースによる認証」に変わります（通常は「ユーザー認証データベースによる認証」→「RADIUS サーバーによる認証」の順）。

2.2 オーバーラップ STP の併用可能機能

 「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」 / 「ポート」

ポートランキングとオーバーラップ STP、LACP とオーバーラップ STP の併用が可能になりました。

2.3 追加コマンド：ENABLE/DISABLE SWITCH FILTER VLANSECURE

 「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」 / 「ポート」

ポートセキュリティー機能において、本体宛のパケットに対するポートセキュリティー動作の有効/無効を設定するコマンドが追加されました。デフォルトは有効（ENABLE）です。

ENABLE SWITCH FILTER VLANSECURE

本体宛のパケットにおいてポートセキュリティーの動作が有効となります。

DISABLE SWITCH FILTER VLANSECURE

本体宛のパケットにおいてポートセキュリティーの動作が無効となります。

備考

本コマンドで動作に影響があるのは、ADD SWITCH FILTER コマンドで ACTION=FORWARD パラメーターを指定した場合のみとなります。

2.4 EPSR Aware

 **「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」 / 「EPSR Aware」**

リング構成の Ethernet ネットワークに特化したレイヤー 2 のループ防止・冗長化機能、イーサネットリングプロテクション (EPSR) の EPSR Aware 機能に対応しました。本製品は、EPSR ドメインを形成するノードの一つ、アウェアノードとして動作します。

2.5 EAP-TTLS、EAP-PEAP のサポート

 **「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」 / 「ポート認証」**

802.1X Authenticator ポートにおいて、認証方式 EAP-TTLS と EAP-PEAP に対応しました (EAP-TTLS、EAP-PEAP を使用する Supplicant を認証できるようになりました)。なお、本機能に関する設定項目はありません (設定は不要です)。

2.6 DHCP Snooping

 **「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」 / 「DHCP Snooping」**

DHCP サーバー・クライアント間でやりとりされる DHCP メッセージを監視して動的な IP ソースフィルタリングを行う DHCP Snooping をサポートしました。本機能を利用すれば、DHCP サーバーを用いたネットワーク環境において、正当な DHCP クライアントにだけ IP 通信を許可することができます。

2.7 ダイナミック ARP エントリーの一括削除

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP」 / 「ARP」**

DELETE IP ARP コマンドが拡張され、ARP キャッシュからダイナミックエントリーを一括削除できるようになりました。一括削除を行うには、ARP パラメーターの値として新しく追加されたキーワード ALLDYNAMIC を指定します。

2.8 マルチキャスト MAC アドレスの ARP エントリー

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP」 / 「ARP」**


マルチキャスト MAC アドレスの ARP エントリー (例: IP=192.168.10.2 / MAC=01-00-5e-28-0a-02) を ARP キャッシュに登録するかどうかを選択できるようになりました。設定は新しく追加された ENABLE/DISABLE IP MACDISPARITY コマンドで行います。デフォルトは登録不可ですが、ENABLE IP MACDISPARITY コマンドを実行すると登録可能になります。なお、本設定はダイナミックエントリーとスタティックエントリーの両方に適用されます。

2.9 IPv6

 **「コマンドリファレンス」 / 「IPv6」**

IPv6 をサポートしました。追加された機能、コマンドなどに関しては、コマンドリファレンスの「IPv6」をご覧ください。

2.10 PING/SET PING/TRACE/SET TRACE/TELNET コマンドのIPv6 対応

 **「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」**
「コマンドリファレンス」 / 「IP」

PING、SET PING コマンドが拡張され、指定したIPv6 アドレスに対する Ping ができるようになりました。TRACE、SET TRACE コマンドが拡張され、指定したIPv6 アドレスまでの経路をトレースできるようになりました。これらのコマンドでは、送信元のアドレスにも IPv6 アドレスを指定できます。また、TELNET コマンドが拡張され、指定した IPv6 アドレスのホストに Telnet 接続できるようになりました。

3 本バージョンで修正された項目

ファームウェアバージョン **2.7.3-07** から **2.7.6-05** へのバージョンアップにおいて、以下の項目が修正されました。

- 3.1 繰り返し高負荷がかかった場合、コンソールの応答が遅くなり、ハングアップすることがありましたが、これを修正しました。
- 3.2 RRP Snooping が有効な場合、FDB と ARP テーブルが連動しないことがありましたが、これを修正しました。
- 3.3 多数の設定スクリプトを作成し、「DELETE FILE=*.cfg」のように一度に削除した場合、コンソールが数分間停止したままになり、リブートすることがありましたが、これを修正しました。
- 3.4 UPLOAD コマンドを入力後、続けて ? キーを押してもヘルプが表示されませんでした。これを修正しました。
- 3.5 DHCP サーバー機能使用時、クライアントに IP アドレスを割り当てると不正な ARP キャッシュログが記録されることがありましたが、これを修正しました。
- 3.6 コンパクトフラッシュ上のディレクトリー名が長い場合、SHOW CFLASH コマンドが正常に動作しないことがありましたが、これを修正しました。
- 3.7 HTTP によるファームウェアファイルのダウンロードに失敗した場合、本体のフラッシュメモリーに異常が発生することがありましたが、これを修正しました。
- 3.8 IEEE 8021-PAE.MIB において、各オブジェクトの Object ID が 1 つずつずれていましたが、これを修正しました。
- 3.9 ADD SNMP GROUP コマンドで SECURITYLEVEL に noAuthNoPriv を指定した場合、当該のユーザーグループに属するユーザーが SNMP マネージャーから設定を変更することができなくなることがありましたが、これを修正しました。
- 3.10 SET TELNET コマンドの MAXSESSIONS パラメーター（同時に確立可能な Telnet セッション数）が正しく機能しませんでした。これを修正しました。

- 3.11 トランクグループと VLAN を作成した設定スクリプトを保存し、起動スクリプトとして設定した後再起動すると、ポート 1 へだけ VLAN を越えてパケットが転送されることがありましたが、これを修正しました。
- 3.12 Rapid モードのスパニングツリープロトコル (RSTP) で非ルートブリッジとして動作している場合、ポートが Discarding 状態から Forwarding 状態に遷移するときのフォワードディレイタイムとして、ルートブリッジの値ではなく自身の設定値を使用していましたが、これを修正しました。
- 3.13 スパニングツリープロトコル (STP) 有効時に Topology Change が発生すると、すべてのポートから ARP エントリーが削除されていましたが、これを修正しました。
- 3.14 Rapid モードのスパニングツリープロトコル (RSTP) を使用しているとき、SHOW STP COUNTER で表示される TCN BPDU の値がカウントされませんでしたでしたが、これを修正しました。
- 3.15 Rapid モードのスパニングツリープロトコル (RSTP) 有効時、Topology change が起きた後、FDB が正常に登録されないことがありましたが、これを修正しました。
- 3.16 ポートトランッキング (または LACP) とスパニングツリープロトコル (STP/RSTP) を併用するとループが起こることがありましたが、これを修正しました。
- 3.17 スパニングツリープロトコル (STP) 有効時、スイッチポートがリンクダウンしても STP のポート状態が Forwarding のまま変化しないことがありましたが、これを修正しました。
- 3.18 STANDARD モードと RAPID モードの両方の STP ドメインに属するポートにおいて、SET STP PORT コマンドで PATHCOST パラメーターを変更すると、エラーメッセージが表示されることがありましたが、これを修正しました。
- 3.19 オーバーラップ STP を使用している場合に Topology Change が発生すると、すべての STP ドメインの FDB をクリアすることがありましたが、これを修正しました。
- 3.20 スパニングツリープロトコルの動作モードが STANDARD モードの場合に、DISABLE SWITCH PORT コマンドでポートを無効にしても、SHOW STP PORT コマンドを実行して表示される「State」欄の表示が Forwarding のままで、Disabled に変化しないことがありましたが、これを修正しました。
- 3.21 ADD SWITCH L3FILTER ENTRY コマンドで EPORT パラメーターを指定した場合、フィルター対象パケットの終点 IP アドレスが FDB に登録されていないと、NODROP アクションが機能しませんでしたでしたが、これを修正しました。
- 3.22 DISABLE PORTAUTH コマンドを実行しても、認証済み Supplicant のスイッチフィルターエントリーが削除されませんでしたでしたが、これを修正しました。

- 3.23** Authenticator ポート、MAC ベース認証ポートにおいて、Supplicant の再認証を有効にし (REAUTHENABLED=TRUE)、再認証間隔 (REAUTHPERIOD) を短い値 (10 秒程度) に設定している場合、または、複数のポートで再認証を有効にしている場合、認証処理の発生するタイミングでリブートすることがありましたが、これを修正しました。
- 3.24** 802.1X 認証の Authenticator ポート、または、MAC ベース認証ポートに設定したポートで、ポートに接続してきた Supplicant の認証に成功、失敗、タイムアウトのいずれの場合でも、SHOW PORTAUTH PORT コマンドの「Backend Authenticator State」欄に表示される認証機構の状態が IDLE のまま状態の変化が反映されず、802.1X MIB の dot1xAuthBackendAuthState の値にも反映されないことがありましたが、これを修正しました。
- 3.25** ソース IP アドレスが 0.0.0.0 に設定された Gratuitous ARP を ARP テーブルに登録できるようにしました。これにより、Windows Vista クライアントの IP アドレス重複を回避できるようになりました。
- 3.26** SET PING POLL コマンド入力の際、コマンドに続けて ? キーによるヘルプを表示すると、IP アドレスに間違った値が設定されてしまうことがありましたが、これを修正しました。
- 3.27** 不正な IGMPv2 Leave Group メッセージを受信した場合、本来 IGMP Snooping の統計カウンターにて badLeave にカウントされるはずが、inLeave にカウントされることがありましたが、これを修正しました。
- 3.28** ADD DHCP POLICY コマンド、SET DHCP POLICY コマンドの TIMEOFFSET パラメーターを、-86399 ~ +86399 (単位 : 秒、-23:59:59 ~ +23:59:59) の範囲で設定できるように修正しました。

4 本バージョンでの制限事項

ファームウェアバージョン **2.7.6-05** には、以下の制限事項があります。

4.1 スクリプト

スクリプトで IF THEN ELSE 文を使用する際、比較対象文字列の長さが 32 文字以上の場合、スクリプトが正しく動作しません。31 文字以下の長さの比較対象文字列を使用して下さい。

4.2 記憶装置とファイルシステム

 **【コマンドリファレンス】 / 【運用・管理】 / 【記憶装置とファイルシステム】**

コンパクトフラッシュ使用時、コンパクトフラッシュの空き容量がない状態で新しく設定スクリプトをコンパクトフラッシュに作成しようとする時、「Operation Successful」と表示されることがあります。なお、この状態でコンパクトフラッシュの内容を SHOW FILE コマンドまたは PC で確認すると、作成したファイルが存在するようには見えませんが、ファイルには何も記録されません。

4.3 認証サーバー

 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「認証サーバー」

- 複数のIP インターフェース (IP アドレス) を設定している場合、RADIUS Access-Request パケットの始点 IP アドレスと NAS-IP-Address の値が異なることがあります。両者を一致させたい場合は、RADIUS サーバーの指定時 (ADD RADIUS SERVER コマンドの実行時) に、LOCAL パラメーターでローカル IP インターフェースを指定してください。
- RADIUS サーバーを複数登録している場合、最初に登録した RADIUS サーバーに対してのみ、SET RADIUS コマンドの RETRANSMITCOUNT パラメーターが正しく動作しません。最初の RADIUS サーバーへの再送回数のみ、RETRANSMITCOUNT の指定値よりも 1 回少なくなります。

4.4 アップロード・ダウンロード

 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「アップロード・ダウンロード」

TFTP によるアップロード時 (UPLOAD METHOD=TFTP)、IPv6 アドレスの指定ができません。

4.5 ログ

 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「ログ」

DESTINATION=NVS のログ出力先定義に対し、SET LOG OUTPUT コマンドで MESSAGES パラメーター (保存件数) を変更すると、すでに NVS 上に保存されていたメッセージがすべて消去されます。

4.6 SNMP

 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「SNMP」

- dot3StatsCarrierSenseErrors の値が取得できません。
- イーサネット MIB の dot3StatsFrameTooLongs が正しくカウントアップされません。
- 既に作成されているユーザーグループに対して SET SNMP GROUP コマンドで SECURITYLEVEL を変更することはできません。

4.7 SHOW NTP コマンドの「Host Address」表示

 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「NTP」

本製品の IP アドレスを変更しても、SHOW NTP コマンドの「Host Address」欄 (NTP モジュールの使用している IP アドレス) が更新されません。これは表示だけの問題で動作には影響ありません。

4.8 ターミナルサービス

 **「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「ターミナルサービス」**


TELNET コマンドの実行時に DNS サーバーへの問い合わせが行われた場合、DNS サーバーからの応答に IPv6 アドレスが含まれていると、TELNET コマンドが反応しなくなります。

4.9 ポートトランキング

 **「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」 / 「ポート」**

- 同じポートにポートトランキングとポートセキュリティを併用した場合、ポートセキュリティにより登録した MAC アドレスがトランクグループに移動しません。
- ポートトランキングとスパニングツリープロトコルを併用した場合、古い番号のポートがマスターポートになる場合があります。
- ポートトランキングと IGMP Snooping の併用時、マスターポートがリンクダウンすると SHOW IGMP SNOOPING コマンドで表示される Entry timeout 値が更新されます。これは表示だけの問題であり、動作には影響ありません。
（「マスターポート」はトランクグループ内で最初にリンクアップしたポートを示します）
- トランクグループに所属するポートを、DISABLE SWITCH PORT コマンドの LINK パラメーターの指定で物理的にリンクダウンさせた後で、ENABLE SWITCH PORT コマンドでリンクアップさせると、ポートトランキングが正常に動作しなくなります。
トランクグループに所属するポートを無効にしないでください。
- 通常、トランクグループに属するポートは、同一 VLAN の所属で、同一のタグ設定（タグ付き・タグなし）にする必要がありますが、ポートをトランクグループに登録後、SET VLAN PORT コマンドによりポートごとのタグ付きまたはタグなしの変更を行うと、「Operation Successful」と表示され、変更が適用されます。
VLAN のタグ付き・タグなしを変更する場合は、トランクグループに所属するすべてのポートについて同じ設定を行ってください。
- マルチプル VLAN（Protected Port VLAN）のアップリンクポートに設定したポートとクライアントポートに設定したポートを、同じトランクグループに所属させることができず、アップリンクポートとクライアントポートは同一のトランクグループに所属させないでください。
- CREATE SWITCH TRUNK コマンドの PORT パラメーターでトランクポートを指定した場合、指定ポートがマルチプル VLAN（Protected Port VLAN）の同一グループ所属であるかのチェックが行われません。これを回避するため、マルチプル VLAN とポートトランキングを併用するときは、先にトランクグループを作成してから、トランクグループをマルチプル VLAN に割り当ててください。

4.10 LACP

 **【コマンドリファレンス】 / 【スイッチング】 / 【LACP (IEEE 802.3ad)】**

- LACP によって自動生成されたトランクグループのメンバーポートに対して CREATE SWITCH TRUNK コマンドを実行すると、通信ができなくなります。
- トランクグループ内のポートがリンクダウンすると、トランクグループ内の他のポートもリンクダウンするため通信が一時的に途絶えることがあります。
- LACP とポートセキュリティーを併用すると、LACP によるトランクグループの生成は行われません。

4.11 ポート認証

 **【コマンドリファレンス】 / 【スイッチング】 / 【ポート認証】**

- 802.1X Multi-Suppllicant モードの Authenticator ポートでは、Port Status が authorised でも IGMP Query パケットがフラッディングされません。
- ENABLE/SET PORTAUTH PORT コマンドの SERVERTIMEOUT パラメーターが正しく動作しません。これは、SET RADIUS コマンドの TIMEOUT パラメーターと RETRANSMITCOUNT パラメーターの設定が優先されているためです。SET RADIUS コマンドで $\text{TIMEOUT} \times (\text{RETRANSMITCOUNT} + 1)$ の値を SERVERTIMEOUT より大きく設定した場合は、SERVERTIMEOUT の設定が正しく機能します。
- ポートの 802.1X 認証機能をいったん無効にしてから再度有効にすると、Authenticator は Suppllicant の MAC アドレスをゲスト VLAN 上で学習しません。
- SNMP マネージャーで、dot 1xAuthAuthControlledPortControl の情報を変更 (Set) した後、設定を保存すると、設定の変更が設定ファイルに反映されません。Authenticator ポートの状態を手動で変更する場合は、SET PORTAUTH PORT コマンドの CONTROL パラメーターで指定してください。
- ENABLE PORTAUTH PORT コマンドで、MAC ベース認証ポートを指定して、SECUREVLAN パラメーターの設定を変更しても、ポートに接続してきた Suppllicant の MAC アドレスの設定には反映されません。SET PORTAUTH PORT SUPPLICANTMAC コマンドで、Suppllicant の MAC アドレスを指定して、SECUREVLAN パラメーターの設定を行うことで、設定は反映されます。

4.12 スパニングツリープロトコル

 **【コマンドリファレンス】 / 【スパニングツリープロトコル】**

- トランクグループに含まれたポートに対して SET STP PORT コマンドで PORTPRIORITY パラメーターを設定し、CREATE CONFIG コマンドで設定を保存し、SET CONFIG コマンドで保存したファイルを起動スクリプトに指定すると、システム再起動時にエラーが表示され、該当ポートの PORTPRIORITY 設定が有効になりません。これを回避するには、起動スクリプトを編集してください。

たとえば、トランクグループにポート 1 とポート 2 が設定されていて、これらをデフォルト STP ドメインに含めているような場合は、STP 設定の次のような箇所を探します。

```
set stp port=1 portpriority=xx
```

```
set stp port=2 portpriority=xx
```

この箇所を次のように書き換え、PORT パラメーターにトランクグループ全体を範囲指定するようにしてください。

```
set stp port=1-2 portpriority=xx
```

- 複数のトランクグループと、デフォルト以外の STP ドメインを併用した場合、再起動後、SHOW STP PORT コマンドを実行して表示される STP の状態が正しく表示されません。これは表示だけの問題であり、動作には影響ありません。

4.13 フォワーディングデータベース

 「コマンドリファレンス」 / 「フォワーディングデータベース」

エラーパケットを受信したときも、送信元 MAC アドレスをフォワーディングデータベース (FDB) に登録します。

4.14 ハードウェアパケットフィルター

 「コマンドリファレンス」 / 「ハードウェアパケットフィルター」

フレームタイプ 802.3 raw の IPX パケットにマッチさせるため、DSAP / SSAP = 0xFFFF の条件を持つフィルターエントリーを作成した場合、このエントリーはフレームタイプ Ethernet 2 の IPX パケットにもマッチしてしまいます。

4.15 IP

 「コマンドリファレンス」 / 「IP」

本バージョンでは、PURGE PING TOTALLY コマンドは未対応となっております。

4.16 IP インターフェース

 「コマンドリファレンス」 / 「IP」 / 「IP インターフェース」

- DHCP クライアント機能を有効から無効に変更しても (IP アドレスを固定設定しても)、該当インターフェースから DHCP サーバー宛ての要求パケットが送信され続けることがあります。
- ADD/SET IP INTERFACE コマンドで他の VLAN と重複するネットワークアドレス (IP アドレス / ネットマスク) を指定しても、エラーになりません。重複したアドレスを設定しないよう注意してください。

4.17 IGMP Snooping

 「コマンドリファレンス」 / 「IP」 / 「IGMP Snooping」

IGMP Snooping 使用時、複数のメンバーが存在するマルチキャストグループから 1 つのメンバーが脱退すると、SHOW IGMP SNOOPING コマンドで表示される Entry timeout が更新されません。

4.18 IGMP

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP マルチキャスト」 / 「IGMP」**

- Last Member Query Interval タイマーの起動中に Report メッセージを受信しても、同タイマーが更新されず、Group-specific Membership Query を再送信してしまいます。
- IGMP 設定時、Startup Query Count は本来 Robustness Variable と同じ値になるはずですが、Robustness Variable-1 になっています。

5 取扱説明書・コマンドリファレンスの補足・誤記訂正

取扱説明書、および「CentreCOM 8424XL/8424TX コマンドリファレンス 2.7 (Rev.F)」の補足事項と誤記訂正です。

5.1 スタンドキット「AT-STND-J01」について (CentreCOM 8424TX のみ対象)

 **「CentreCOM 8424XL/8424TX 取扱説明書」17 ページ**

取扱説明書に記載がありませんが、CentreCOM 8424TX はスタンドキット「AT-STND-J01」に対応しています。

5.2 ポート帯域制限 (送信レート) の設定について

 **「取扱説明書」45 ページ**

バージョン 2.6.1 で、SET SWITCH PORT コマンドの EGRESSLIMIT パラメーターで、ポート帯域制限の送信レートの設定を変更した場合、設定を有効にするために本製品を再起動する必要がなくなりました。

5.3 フラッディングレートについて

10/100Mbps ポートが 24 ポートリンクした状態で、拡張モジュールの 1000Mbps ポート (ポート 25) からフラッディングパケットを送信すると、1000Mbps ポート (ポート 26) から送信されるパケットの転送率が下がる場合があります。

5.4 SNMP について

 **「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「SNMP」**

ブロードキャストパケット受信時に、SHOW INTERFACE コマンドで表示される VLAN インターフェースの ifInDiscards がカウントされます。

5.5 ログ機能について

「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「ログ」

出力先に「TEMPORARY」と「PERMANENT」を設定して CREATE LOG OUTPUT コマンドで出力先の定義のみ行って設定を保存し再起動すると、メッセージフィルターのエントリが設定されないためログは出力されないはずですが、ログが出力されることがあります。これは、本製品がデフォルトの状態ではログ機能が有効であり、起動時にログの出力先として「TEMPORARY」と「PERMANENT」を設定して、メッセージフィルターが追加されるため、設定ファイルの CREATE LOG OUTPUT コマンドが実行されるまでの間、ログが出力されるためです。

5.6 スイッチング動作について

「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」

- パケットの送信先 MAC アドレスが BPDU のアドレスになっていても、DSAP (Destination Service Access Point) / SSAP (Source Service Access Point) に「0x42」が指定されていない場合は、BPDU 透過機能の対象にはなりません。
- 予約済マルチキャストパケットの処理で、送信元アドレスが、01-80-C2-00-00-00 ~ 01-80-C2-00-00-10 および 01-80-C2-00-00-20 ~ 01-80-C2-00-00-2F のパケットはフィルタリングされます。それ以外のパケットは、フラッディングされます。

5.7 1000M Full Duplex 固定設定時の LED 表示について

「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」 / 「ポート」

拡張モジュールスロットに、拡張モジュール「AT-A51」または「AT-A53」を装着したときに、SET SWITCH PORT コマンドで SPEED=1000MFULL を指定してケーブルを接続してリンクが確立した後にケーブルを抜くと、下記の場合に、LINK LED の表示が正しくなくなります。

- ・ TX ポートのケーブルを抜くと、ケーブルを抜いた機器の LINK LED が点灯したままになる
- ・ RX ポートのケーブルを抜くと、ケーブルを抜いていない機器の LINK LED が点灯したままになる

どちらの場合も、LINK LED が点灯したままのポートのリンクステータスは、Up のままです。

5.8 MAC ベース認証ポートについて

「コマンドリファレンス」 / 「スイッチング」 / 「ポート認証」

MAC ベース認証ポートにおいて、認証に成功した Supplicant を定期的に再認証する設定 (ENABLE PORTAUTH PORT コマンドの REAUTHENABLED パラメーターに TRUE を指定) にしても再認証が行われません。

5.9 VLAN 名の文字数について

 **「コマンドリファレンス」 / 「バーチャル LAN」**

バージョン 2.7.3-06 から、VLAN 名に使用できる文字数が 15 文字から 32 文字に拡張されました。16 文字以上の VLAN 名を指定して設定を保存し、ファームウェアをバージョン 2.7.3-06 より前のものに変更して、保存した設定ファイルを起動時設定ファイルに設定すると、16 文字以上の VLAN 名は有効でないため、VLAN の設定が反映されません。

5.10 タグ VLAN 併用時の STP BPDU について

 **「コマンドリファレンス」 / 「スパンニングツリープロトコル」**

スパンニングツリープロトコル (STP) とタグ VLAN の併用時、タグつきポートが単一の VLAN に属する場合、BPDU にはタグを付加しません。タグつきポートが複数の VLAN に属する場合は、BPDU にはタグが付加されます。

5.11 ハードウェアパケットフィルターについて

 **「コマンドリファレンス」 / 「ハードウェアパケットフィルター」**

- ADD SWITCH L3FILTER MATCH コマンドの NOMATCHACTION パラメーターでデフォルトのアクションを指定したハードウェアパケットフィルターが存在する場合、その他のフィルターにマッチするパケットに対して、このアクションが実行されてしまいます。
- 複数のマッチ条件を指定したとき、マッチ条件の型が一致するような場合には、本製品のソフトウェアでマッチ条件が一つにまとめられる場合があります。同じパケットに対する処理でも、複数のマッチ条件がまとめられた場合と、一つ一つ実行された場合で、結果が異なることがあります。

5.12 ICMP Reply の送信について

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP」**

VLAN A、B を作成し、それぞれの VLAN に別ネットワークのアドレスを指定 (VLAN A に 192.168.1.10、VLAN B に 192.168.1.20 指定、VLAN 内にルーターが存在) した場合には、VLAN A に所属する端末 C から VLAN B 宛に ICMP Request を送信すると、VLAN A と B は異なるネットワークに所属するにも関わらず、ルーターを介さずに、VLAN A から ICMP Reply が送信されます。またこの場合に、VLAN B から A への通信にハードウェアパケットフィルターを設定していても、この ICMP Reply はフィルターの条件にマッチしません。これは、ICMP Reply を送信する際に、送信先アドレスを IP アドレスのみで検索し、そのアドレスの所属するインターフェースを送信元としているためです。

5.13 DNS サーバーの動的取得について

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP」 / 「名前解決」**

ADD IP DNS コマンドの INTERFACE パラメーターで、DNS サーバーアドレスを DHCP で動的に取得するよう設定していないにもかかわらず、DNS サーバーアドレスが動的に取得されます。

5.14 ARP エントリーについて

 「コマンドリファレンス」 / 「IP」 / 「ARP」

- インターフェースの状態が Up になった場合、同一ポート上に登録された他の ARP エントリーはすべて削除されます。
- ARP キャッシュに学習されたポートに ICMP パケットを送信し続けた場合、ARP エントリーはエージアウトされません。

5.15 Query メッセージの送信間隔について

 「コマンドリファレンス」 / 「IP マルチキャスト」 / 「IGMP」

Startup Query Interval の間隔で Query メッセージが送信されるのは、起動後に、最初に IGMP を有効にした場合のみで、一度 IGMP を無効に設定してから再度有効に設定した場合は、Startup Query Interval の間隔では送信されません。

5.16 DHCP サーバー機能について

 「コマンドリファレンス」 / 「DHCP サーバー」

- DHCP クライアントからのオプション 57(Maximum DHCP Message Size) メッセージを受けられません。
- SET DHCP POLICY コマンドの TIMEOFFSET パラメーターには、マイナスの値を設定することができます。

6 未サポートコマンド (機能)

以下のコマンド (機能) はサポート対象外ですので、あらかじめご了承ください。
太字はコマンド名、細字は該当コマンドのパラメーター名です。

SHOW EXCEPTION
SHOW DEBUG [STACK]
SHOW BUFFER [SCAN] [QUEUEPOINTERS]
SHOW FLASH FFS
CLEAR FLASH TOTALLY
DELETE NVS BLOCK [INDEX]
CLEAR NVS TOTALLY
SHOW FFILE VERIFY
SHOW FFILE [DEBUG]
PURGE FILE TRANSLATIONTABLE
CLEAR CFLASH
SHOW CFLASH COUNTERS
SHOW CFLASH TEST
SHOW CFLASH REGISTER
SHOW CFLASH SECTOR
SHOW CFLASH FAT
SHOW CFLASH IDENTITY
ENABLE CFLASH DEBUG
DISABLE CFLASH DEBUG
ENABLE CFLASH TEST END [START]
DISABLE CFLASH TEST
ADD USER [MTU] [NETMASK] [CBNUMBER] [IPXNETWORK] [APPLENETWORK]
 [APPLEZONE] [CALLINGNUMBE]
SET USER [MASK] [MTU] [NETMASK] [CBNUMBER] [IPXNETWORK]
 [APPLENETWORK] [APPLEZONE] [CALLINGNUMBE] [TACRETRIES]
 [TACTIMEOUT]
ENABLE MAIL DEBUG
DISABLE MAIL DEBUG
RESET MAIL
SET MAIL SMTPSERVER=ipaddr
CREATE LOG OUTPUT [LOCAL]
SET ASYN [ENABLE] [TIMEOUT] [IDLETIMEOUT] [SHELLSERVER]
 [TENTIMERVALU]
SET TTY IDLETIMEOUT

ENABLE SWITCH DEBUG
DISABLE SWITCH DEBUG
SHOW SWITCH DEBUG
ENABLE SWITCH BIST
SHOW SWITCH BIST
SHOW SWITCH MEMORY
SET SWITCH SOCK
SHOW SWITCH SOCK
SET SWITCH PHY

SHOW SWITCH PHY
SHOW SWITCH SWTABLE
SET SWITCH PORT [MODE={MASTER;SLAVE}] [IGMPACTION={DENY;REPLACE}]
 [IGMPFILTER={NONE;filter-id}] [IGMPMAXGROUP={NONE;1..65535}]
SET SWITCH PORT SPEED={1000MHALF;1000MFAUTO;1000MHAUTO}
ACTIVATE SWITCH PORT AUTONEGOTIATE
ENABLE PORTAUTH DEBUG={ALL;PACKET;STATE} PORT={port-list;ALL}
DISABLE PORTAUTH DEBUG={ALL;PACKET;STATE} PORT={port-list;ALL}
ENABLE RADIUS DEBUG
DISABLE RADIUS DEBUG
SHOW RADIUS DEBUG

ENABLE VLAN DEBUG
DISABLE VLAN DEBUG
SHOW VLAN DEBUG

ENABLE STP DEBUG [PORT]
DISABLE STP DEBUG [PORT]
SHOW STP DEBUG
SHOW STP[={stp-name;ALL}] PORT={port-list;ALL} RSTPSTATE

ADD MSTP MSTI VLAN
CREATE MSTP MSTI
DELETE MSTP MSTI VLAN
DESTROY MSTP MSTI
DISABLE MSTP
DISABLE MSTP CIST PORT
DISABLE MSTP DEBUG MSTI
DISABLE MSTP MSTI PORT
ENABLE MSTP
ENABLE MSTP CIST PORT
ENABLE MSTP DEBUG MSTI
ENABLE MSTP MSTI PORT
PURGE MSTP
RESET MSTP COUNTER PORT
SET MSTP
SET MSTP CIST
SET MSTP CIST PORT
SET MSTP MSTI
SET MSTP MSTI PORT
SHOW MSTP
SHOW MSTP CIST
SHOW MSTP CIST PORT
SHOW MSTP COUNTER PORT
SHOW MSTP DEBUG MSTI
SHOW MSTP MSTI
SHOW MSTP MSTI PORT

ENABLE SWITCH L3FILTER SWFILTBYPASS
DISABLE SWITCH L3FILTER SWFILTBYPASS

SHOW IP CACHE
SHOW IP CASSI
ENABLE IP DEBUG
DISABLE IP DEBUG
SHOW IP DEBUG
SHOW PING DEBUG
PURGE PING TOTALLY
SHOW TRACE DEBUG
SET IP [FLOW] [ARPCHECK]
SHOW IP FLOW
ENABLE TCP DEBUG
DISABLE TCP DEBUG
ENABLE IP ICMPREPLYMSG={ALL;NETUNREACH;HOSTUNREACH;REDIRECT}
DISABLE IP ICMPREPLYMSG={ALL;NETUNREACH;HOSTUNREACH;REDIRECT}
SHOW IP ICMPREPLYMSG
ENABLE IP [SPOOFCHECK]
DISABLE IP [SPOOFCHECK]
ADD IP INTERFACE IPADDRESS FRAGMENT
SET IP INTERFACE IPADDRESS FRAGMENT
ENABLE IP ROUTE DEBUG
DISABLE IP ROUTE DEBUG
SHOW IP ROUTE DUMP
SET IP DNS CACHE
SHOW IP DNS CACHE
ENABLE IP ARP [AGEPOLL]
DISABLE IP ARP [AGEPOLL]
SET IP ARPWAITTIMEOUT
SET IP ARP REFRESHARP
ENABLE PING POLL=1..100 DEBUG
DISABLE PING POLL=1..100 DEBU

ENABLE IP IGMP DEBUG
DISABLE IP IGMP DEBUG
SHOW IP IGMP DEBUG
CREATE IP IGMP DESTINATION
ADD IP IGMP DESTINATION
DELETE IP IGMP DESTINATION
DESTROY IP IGMP DESTINATION
ENABLE IP IGMP ALLGROUP
DISABLE IP IGMP ALLGROUP
ADD IGMP FILTER
CREATE IGMP FILTER
DELETE IGMP FILTER
DESTROY IGMP FILTER
SET IGMP FILTER


```
SHOW IGMP FILTER
ADD IGMP Snooping RouterAddress
DELETE IGMP Snooping RouterAddress
SET IGMP Snooping RouterMode
SHOW IGMP Snooping RouterAddress
SET IGMP Snooping RouterMode FastLeave
```

```
ENABLE DHCP [BOOTP] [DEBUG]
DISABLE DHCP [BOOTP] [DEBUG]
```

```
LOAD [SERVER=ip6add]
UPLOAD [SERVER=ip6add]
SET Loader [SERVER=ip6add]
ADD USER RSO IP=ip6add
DELETE USER RSO IP=ip6add
ADD PING POLL IPADDRESS=ipv6add
SET PING POLL [IPADDRESS=ipv6add]
```

```
ENABLE MLDSNOOPING DEBUG
DISABLE MLDSNOOPING DEBUG
```

7 コマンドリファレンスについて

最新のコマンドリファレンス「CentreCOM 8424XL/8424TX コマンドリファレンス 2.7 (J613-M0005-13 Rev.F)」は弊社ホームページに掲載されています。

本リリースノートは、上記のコマンドリファレンスに対応した内容になっていますので、お手持ちのコマンドリファレンスが上記のものでない場合は、弊社 Web ページで最新の情報をご覧ください。

コマンドリファレンスのパーツナンバー「J613-M0005-13 Rev.F」はコマンドリファレンスの全ページ（左下）に入っています。

<http://www.allied-telesis.co.jp/>